

《書 評》

Elsbeth R. M. Dusinberre, *Aspects of Empire in Achaemenid Sardis*

(Cambridge University Press, Cambridge, 2003, xv + 325頁)

阿 部 拓 児

1

前6世紀中葉、キュロス2世がメディアの支配領域を受け継ぎ、リュディア王国、新バビロニア王国などを征服して築いたアカイメネス朝ペルシア帝国は、その半世紀後のダレイオス1世治下、西はエジプトから東はインダス河にまで跨る大帝國となった。アカイメネス朝帝国は長らく、典型的なオリエン特的専制君主政国家として表象されてきた。しかし近年では、これに反してアカイメネス朝を慈悲深き帝国としてみなし、被支配地域にたいするアカイメネス朝の文化的影響力はきわめて微弱であったとする主張もみられる。それではいったいアカイメネス朝による支配は、ローカルな文化にたいして、いかなる影響を与えたのであろうか。エルスベス・デュシンベリーが本書で掲げた課題とは、アカイメネス朝支配期のサルデイスをケース・スタディとして考察することにより、上記の問いにたいする一定の解答を導き出すことであった。

サルデイスは小アジア沿岸から100キロメートルほど内陸に位置する都市である。前アカイメネス朝期のリュディア王国時代から首都として繁栄し、王国最後の王クロイソス時代の栄華は、ヘロドトス『歴史』のなかでも詳しく語られている(Hdt., I, 26-92)。前6世紀中葉にリュディア王国がアカイメネス朝に征服された後も、サルデイスは帝国の小アジア支配の拠点として、その重要性を保持していた。

アカイメネス朝期サルデイスにかんする文献史料は、その大半がギリシア語によって書かれたという問題はあるが、リュディア王国時代にかんする記述も含め、豊富に残っている。また考古学的史料についても、第二次大戦以降のG.M.A.ハンフマンを中心としたハーヴァード大学・コーネル大学による組織的な調査ゆえに、多くの情報を手にすることができる。デュシンベリーはこれら文献史料と考古学的史料を駆使することにより、当該時期サルデイスの文化的状況、とりわけアカイメネス朝支配の影響について考察していく。

本書は、本論9章と補論5章から成る。本論の章題は以下の通りである。

- 第1章 アカイメネス朝帝国におけるサルデイス
- 第2章 文献史料と帝国の影響
- 第3章 アカイメネス朝期サルデイスの都市構造——モニュメントと意味——
- 第4章 アカイメネス朝期サルデイスの都市構造——彫像と社会——
- 第5章 碑文——自身の言葉のなかに現れるサルデイスの人々——
- 第6章 埋葬の証拠——死者と生者の社会——
- 第7章 個人を表示するもの——石製印章——
- 第8章 アカイメネス式ボウル——陶器の一括遺物と非エリート層——
- 第9章 結論——帝国主義とアカイメネス朝期サルデイス——

2

まずは、本書の構成に即し、内容を紹介したい。

第1章「アカイメネス朝帝国におけるサルデイス」と第2章「文献史料と帝国の影響」は、本書における導入部的な役割を果たしている。第1章では、アカイメネス朝の歴史が概観され、著者が掲げる考察課題が提示される。その後、アカイメネス朝期サルデイスの地理学的・地質学的情報が紹介される。第2章では、ペルシア語やその他のオリエント諸語で書かれた史料で補足しつつ、主にギリシア語文献史料に依拠しながら、アカイメネス朝期サルデイスの歴史が概観される。文献史料からは、サルデイスを統治していたサトラペスはペルシア大王の監督下に置かれており、サルデイスとペルシアはきわめて緊密な関係にあったかのような像が導き出されるという。このような像と、考古学的史料を通してみたサルデイスの文化的状況が、いかに結びつくのか（あるいは乖離するのか）が、次章以降の論点となってくるのである。

第3章、第4章はいずれも都市景観についてあつかっている。サルデイスの居住形態に目を向けると、アカイメネス朝支配を画期とした格別の変化が認められることはない。アカイメネス朝のサトラペスは新たな住居を建設することではなく、以前からあったリュディア王の宮殿を住居として引継ぎ、利用したと考えられる。一般市民の家屋についても、形態上の変化は確認できないという。しかし、都市景観がまったく変化しなかったわけではない。アカイメネス朝支配にともなってサルデイスの城壁は改修され、ペルシアで好まれていた狩猟用の庭園*paradeisoi*（ただし、*paradeisoi*の存在は文献史料から知られるのみで、今のところ考古学的な証拠はない）も導入された。またリュディア王国時代からあったキュベレの祭壇が、この時期に拝火壇に作り変えられた可能性があり、これはマズダー教とのつながりを示唆する現象であるという（第3章「アカイメネス朝期サルデイスの都市構造——モニュメントと意味——」）。

建造物自体から都市景観を飾っていた彫像に論を移すと、彫像特有の問題が議論を困難にする。すなわち、サルデイスで発掘された彫像のうちアカイメネス朝期に属するものはさほど多くはなく、さらにそれらのほとんどすべてがローマ時代やビザンツ時代に建築石材として再利用されたために、それらの彫像がアカイメネス朝期においてはいかなるコンテキストに置かれていたのかが、明らかとなっていないのである。とはいえ、本章では墓碑にみられる饗宴のレリーフ、人間や動物の彫像、アルテミス、キュベレの神像と幅広く考察がなされ、その結果、著者デュシンベリーは、「アカイメネス朝期サルデイスにおける彫像は、様々な影響の融合が、アカイメネス朝期リュディアにおける折衷された新たな表現様式を作り出していることを示している」(pp.109-10)と結論する。また著者は、このようなサルデイスにおける彫像の発展には、芸術家の移動と彼らが互いの様式を交換したことが寄与していると指摘する(第4章「アカイメネス朝期サルデイスの都市構造——彫像と社会——」および補論第1章「彫像」)。

第5章「碑文——自身の言葉のなかに現れるサルデイスの人々——」では、サルデイスから発掘された碑文を題材に論が展開される。現在、われわれが手にしているアカイメネス朝期サルデイスにかんする碑文は、けっして数が豊富とはいえないものの、いくつかの重要な碑文を含んでいる。言語的な比率としてはリュディア語碑文が大半を占め、そのほかにギリシア語碑文、リュディア語／アラム語碑文、リュディア語／ギリシア語碑文などが出土している。またリュディア語碑文の大半は墓碑銘であり、その内容は主に墓荒らしにたいする警告文となっている。本書ではリュディア語碑文が個別にとりあげられて論じられることはなく、その内容自体よりもむしろ、リュディア語が一般に通用していた点、また碑文に確認されるリュディア語名や墓碑銘の慣習が継続していた点などが重視されている。デュシンベリーによれば、これらの諸点は「アカイメネス朝の支配体制が、ローカルな慣習の継続を許しながら、発展する能力を持っていたことを例証している」(p.127)のだという。なお、補論第2章「年代推定可能な碑文」では、本章で考察されたリュディア語碑文、ギリシア語碑文の英訳が収められている。

第6章、第7章では、エリート層の文化にかんする遺物(墳墓と石製印章)について考察される。第一次大戦前後、H.C.バトラー率いるプリンストン大学の発掘隊がサルデイスを調査したが、その際、少なくとも1,154の墓が調査され、そのうち約160の墓には埋葬品が残っていた。しかし、ほとんどの墓について、図像が描き残されたり、詳細に記述されることはなかったため、現在サルデイスの墓にかんする考察は困難となっている(p.131)。サルデイスの墓は、墳丘墓、岩穴墓、石棺の3タイプに分類されうる。富やステータスは、このいずれのタイプの墓に埋葬されるのかという選択基準にはならなかったという。したがって、いずれの基準をもって墓が選択されていたのかは不明なのだが、デュシンベリーはエスニシティがひとつの基準となっていたと推測する。すなわち、墳丘墓はリュディア王国時代からの伝統につながり、また岩穴墓はペルシア大王の墓を意識しているものと思

われる。このように、墓の形態については規則性を見出せないのであるが、いっぽう副葬品（宝石、印章、装飾品、饗宴用の道具）にかんしては、エリート層のなかで基本的な一貫性を認めることができる。この現象についてデュシンベリーは、「出身地域やエスニックな起源を超越し、エリートをナショナリティよりもむしろステイタスによって結び付けられた集団へとまとめるような、芸術様式における共通言語が存在したことを示している」（p.148）と説く（第6章「埋葬の証拠——死者と生者の社会——」および補論第3章「埋葬にかんする遺物」）。

印章に題材を移しても、デュシンベリーは同様の主張を繰り返している。現在までにサルデイスからは、ピラミッド型、分銅型、円筒型、指輪など多様な形態の印章が出土しており（ピラミッド型がもっとも多い）、そこには動物（ライオンや牡牛など）やそれらと戦う英雄が描かれている。従来このような印章は、20世紀初頭にA.フルトヴェングラーが提唱した「グレコ・ペルシア式」という芸術様式の呼称で括られていたのだが、デュシンベリーはこれを、サルデイスにおけるエスニシティの誤った二極化を招く概念であるとして批判する（ただし、それに代わる新たな呼称は提示せず、引き続き「グレコ・ペルシア式」という呼称を用いている）。そして、「グレコ・ペルシア式」という芸術様式は、じつは「彫刻上のギリシアとペルシアの貧弱な折衷ではなく」（p.171）、「エスニックな背景を横断してエリートを結びつけるような芸術上の共通言語」（p.158）となっていたと主張するのである（第7章「個人を表示するもの——石製印章——」および補論第4章「印章」）。

前章までが、サルデイスの都市構造やエリート市民など、上からの視点で分析されていたのにたいし、第8章「アカイメネス式ボウル——陶器の一括遺物と非エリート層——」では、非エリート層の食習慣における変化が注目される。本章では、時代の異なる（前5世紀から前3世紀末まで）、8つの陶器堆積物が精査され、そこに占めるスキュフォイ（ふたつの取手付きの杯）とアカイメネス式ボウルの比率が検討される。ここでいうアカイメネス式ボウルとは、取手のない杯で、外見上からはワインを飲むために使用されていたと考えられる容器を指す。このアカイメネス式ボウルは帝国全土から出土しているという（p.176。補論第5章「アカイメネス式ボウル」では、サルデイスから出土したアカイメネス式ボウルにかんする簡単な情報が掲載されている）。8つの陶器堆積物における陶器の形態の比率は、時代が下るにつれ、おおむねアカイメネス式ボウルがスキュフォイを上回っていく傾向にある。この分析結果は、アカイメネス朝の支配にともない輸入されたアカイメネス式ボウルが、それ以前から用いられていたスキュフォイに取って代わったことを示しており、ここにデュシンベリーは「サルデイスにたいする長期間にわたるペルシア支配の影響力」（p.194）を認める。

上記の諸章にわたる考察を経た後、第9章「結論——帝国主義とアカイメネス朝期サルデイス——」で改めて著者デュシンベリーの主張が要約され、結論が述べられる。著者は当初、アカイメネス朝による支配がローカルな文化にまったく影響を与えなかったとする

従来の説に反論することを出発点とした。しかし、各章における考察結果より、アカイメネス朝期サルデイスにおける文化とは、ローカルな社会が単純にイラン文化を受容／拒否した結果ではなく、新たなシステムを生み出すような外部からの影響とローカルな文化を結びつけた結果であると結論する。またそれは、言い換えるならば、在来文化による外来文化の単純な摂取ではなく、相互作用、反作用、受容、適応、創造などが複合した過程であり、複数のエスニシティから成るサルデイスのエリート層を結びつける新たな文化の創造を意味しているのだという。

以上のような結論を導き出した後、デュシンベリーは、アカイメネス朝期サルデイスの文化状況をローマ帝国属州の文化状況と比較分析する。その際、著者は1990年代に出版されたふたつの書物、S.E.Alcock, *Graecia Capta: The Landscapes of Roman Greece*, Cambridge, 1993とG.Woolf, *Becoming Roman: The Origin of Provincial Civilization in Gaul*, Cambridge, 1998を比較対象として用いる。オールコックとウルフの両研究者は、それぞれ属州アカイア、属州ガリアを題材に、「ローマ化」の問題について考察している。両研究者の「ローマ化」にたいするアプローチは異なっているが、デュシンベリーはそのいずれにたいしても親近感を抱き、サルデイスにおける文化状況との類似点、あるいは相違点を指摘する。ただし、本箇所は展望としての意味合いも強く、まとまった結論を述べるには至っていないように、評者には思われる。

3

以上、概略的にはあるが、本書の内容を紹介してきた。本書の意義としては、ひとつにはアカイメネス朝期サルデイスの考古学的現状を簡潔に提示している点があげられよう。上述のごとく、20世紀を通して、サルデイスはアメリカの発掘隊によって調査されてきた。両大戦により一時的に中断されることもあったが、第二次大戦後は継続的に発掘調査がなされている。再開当初から隊を指揮していたハーフマンが第一線から退いた際には、それまでの考古学的成果をまとめた書物が出版されたため、大戦後からの約20年間におけるサルデイス発掘の成果については概括的に知ることができる (G.M.A.Hanfmann and W.E.Mierse, *Sardis from Prehistoric to Roman Times: Results of the Archaeological Exploration of Sardis 1958-1975*, Cambridge, MA, 1983)。1975年以降についても、「モノグラフ」と「レポート」というふたつのシリーズに分けられて、ハーヴァード大学出版局から最新の発掘成果が発表されている (シリーズの内容については、ハーヴァード大学美術館のホームページ <http://www.artmuseums.harvard.edu/sardis/publications.html> に掲載されている)。しかし、それらはきわめて細分化されたテーマのもとに編まれており、アカイメネス朝期サルデイスにかんする最新の考古学的成果の全体像をつかむことは容易ではなかった。このような状況のなか、本書は比較的新しい発掘成果をも取り入れつつ、文献史料と考古学的史料を

バランスよく用いて、アカイメネス朝期サルデイスの文化的状況を提示することに成功している。新しい発掘成果という点では、特に第8章にそれが現れている。第8章であつかつている陶器堆積物のなかには1990年代に入ってから発掘されたものもいくつか含まれており、これらの分析を通じて、デュシンベリーは今まで困難だと考えられてきた非エリート層における文化的状況を描き出すことにも、果敢に挑戦している。ただし本書は、1997年に著者が提出した博士論文をもとにしているため、参考文献による限り、今世紀に入ってから研究成果はじゅうぶんにカバーされていない。

次に、最終章におけるアカイメネス朝期サルデイスとローマ帝国属州との比較にみられるように、本書は帝国と被支配地域の文化の問題をとりあつかつており、この分野への貢献も大きい。従来、アカイメネス朝期小アジアにおける文化論は、いわゆる「ギリシア化」の問題に焦点があてられ、先住者の文化がいか「ギリシア化」されてきたかが論じられる傾向にあった。デュシンベリーはこのような「ギリシア化」の議論とは一線を画し、それに代わってアカイメネス朝期サルデイスにおいては、新たなコンテクストのなかの新たな文化が生まれていたことを強調している。しかし、著者は自身の分析視角を理論的に提示しておらず、本書のなかで用いられている様々な用語（acculturation, assimilation, compromise, fusion of cultures, mix of culture, cultural amalgamation and mingling, eclecticなど）がいかに使分けられているのかが曖昧となっているため、評者はしばしば混乱を覚えた。また、著者は「ギリシア化」という用語を慎重に避けていながらも、ときとして「ペルシア化」という語を用いている。むしろ著者は、サルデイスはまったく「ギリシア化」されておらず、「ペルシア化」現象のみが確認されうると主張したかったわけではなかろう。それでは果たして、分析概念としての「ギリシア化」と「ペルシア化」はいかに異なるのであろうか、また一方のみが有効で他方はそうではないといえるのであろうか。かかる点が、評者にはいささか疑問に感じられた。

とはいえ、上述したように本書が世に問われた意義はじゅうぶんに大きく、それはアカイメネス朝期小アジアを専門とする研究者のみならず、広く帝国と被支配地域の文化に関心を持つ研究者にとっても有益な書であり、またそれが著者の意図したところであると、評者は確信している。